統語論と語用論の接点としての文法化

大沢ふよう

1. はじめに

近年、文法化とは言語変化の随伴現象であり、それ自体が言語変化の原理ではないとする見方が広く受け入れられているようである。生成文法の究極の目的は個人に内在する言語システムとその獲得を研究することにあるという前提にたてば、研究の対象は共時的状態に集中する。 さらに、統語論が研究の中心であり、意味論や語用論は二次的なものとなる。統語構造そのものが説明となっているからとする。言語の変化などというものはなく、文法変化があるだけであり、個々の言語の変化とみえるものは文法の変化が引き起こしたものであり、「文法化」などという理論は存在しないと言いきる。従って、研究者がやることは、文法の変化を説明することである。歴史における重要な文法変化は「動詞移動」である。この考え方を完全に否定することはできないが、「文法化」は、世界の多くの言語にみられる現象で共時的にも通時的にも見られる。これに理論的背景を与えることができれば、多くの言語に起こる様々な言語現象を説明できる。この発表では文法化は、それ自体、言語変化を駆動する力を秘めたメカニズムである可能性を探る、つまり「文法化」という独自の過程を立てることには正当性があるのではないかという観点から話していく。

2. 移動規則による、英語の変化の説明

英語における文法化の例としてよく取り上げられる一般動詞だった法動詞が、助動詞という特殊なクラスに変化した現象は、1.で述べた考え方に従えば次のように説明される。古い時代の英語では、V が T の位置に移動できたため、今では許されない、助動詞連続が可能であった。この V 移動が英語においては消失したことが、助動詞を生み出す原因になったとされる。しかしこの説明には、いくつか疑問が出てくる。

(i) 移動規則というのは、構造が確立していないとかからない規則ではないか。ＯＥは、語順はかなり固まっていたとはいえ、PDE に比べれば結構自由である。古英語のテキストから実際の語順を拾ってみると、たくさんの変種が使われていたことがわかる。以下の語順は古英語で実際に使われているものである。

(1) [VS IO DO], [S DO IO V], [S V DO IO], [S IO V DO] (Osawa 2020)

(ii) 機能範疇の確立と語順の固定化は連動しているのではないか。動詞移動が目指す移動先は、機能範疇である。古英語の構造は、現代英語の構造と変わらないとする立場にたてば、機能範疇 T を移動の標的とするもの、機能範疇 C を標的とする移動などが想定されるが、機能範疇ははじめから英語の構造に備わっていたのではなく、途中において創発してきたとする立場にたてば、機能範疇を標的とする移動は機能範疇の創発以前に起こることはない。各機能範疇の創発の時期は、DP に関しては Osawa (2007, 2020) によると 1400 年ごろ、また TP に関してはいわゆる法助動詞の出現が文法化の典型例とされることから、助動詞類が、それとして確立されたころでないと TP が存在したとは証明できないであろう。

3. ２つの文法化

文法化の定義として最もよく知られているのは Hopper and Traugott (2003:18)の次のものであろう。

(2) [Grammaticalization is] a term referring to the change whereby lexical items and constructions come in certain contexts to serve grammatical functions and, once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions.

しかしこの定義は意味的な側面に偏りすぎている。本研究では、統語構造が、語彙的要素から成るものから機能範疇を含むものに変化していく、構造変化が「文法化」の本質であると定義する。この視点にたてば、統語構造は、語彙的要素だけではなく、さらに機能範疇の投射もふくむものに変化していくわけで、構造は複雑化していると言える。文構造は下部の語彙的要素からなる句と上部に来る機能範疇からなる句でもって階層構造をなしており、文法化とは、ツリーの上方へ再分析されながら階層構造を成していくことである。この視点にたてば、統語構造は、語彙的要素だけではなく、さらに機能範疇の投射もふくむものに変化していくわけで、構造は複雑化していると言える。「文法化」とは縮小であるという見方に対して、拡大化、ないし、複雑化の側面があることの適例である。

こうした統語的、構造的文法化と並んで、機能的、語用論的な側面からの文法化研究が存在し、こちらの「文法化」のほうが、古くから、また広範囲に研究がされてきている。即ち、文法化は **2** つ存在する。

(3) non-subjective> subjective >intersubjective(=interpersonal) (Traugott and Dasher 2002: 40)

という cline で表される、非主観的 >主観的 >間主観的　という流れである。意味は客観的な意味から、より主観

的な意味へと変化する方向性がある。この主観化はさらなる段階へと進むと Traugott (2003)は指摘している。さらなる段階とは 間主観化(intersubjectification)である。「間主観化」とは、話者の聞き手（読み手）に対する注意を明確に表現することである。話者が、語ったことに対して、聞き手の態度に注意を向けて、いわば「聞き手」への心遣いを言語化することである。つまり主観化は　more speaker-oriented であり、間主観化は　more hearer-oriented であるといえる。

4. 冠詞の意味素性

現代英語の冠詞の主要な、意味素性は[+/-definite]であるが、名詞句にはもう１つ[+/-specific]　という素性がある。この２つは、似通っているが別物である。[+definite]とは、ある名詞（句）の　指示対象が話者と聞き手、両方に知られている、という意味である。一方、ある名詞（句）が[+ specific] である、ということはその指示対象が話者だけにわかっているという意味である。話し手がその名詞（句）の指す対象を特定できていて、つまり相手（物）を identify できるかどうか、ということである。Indefinite NP は、specific にも non-specific にもなりうる（Cf. Lyons 1999: 165）。名詞（句）は、この２つの意味素性　[+/- definite] [+/- specific]の組み合わせで意味がきまる。４つの組み合わせが存在する。すなわち[-definite, +specific], [-definite, -specific], [+definite, +specific],[+definite, -specific]である。下の Fodor and Sag (1982: 359)からの 例文(4)の a man は、聞き手には知られていないが、話し手は、相手が誰であるか知っているので，　[-definite] と[+specific]という素性の組み合わせとなる。

(4) [- definite, +specific]　A man just proposed to me in the orangery (though I'm much too embarrassed to tell you who it was).

5.　第二言語獲得における 冠詞使用の誤用

日本人は英語の冠詞の使用において誤用が多いと言われる。その原因として日本語には英語の冠詞に当たるものが存在しないとされる。この誤用は、ロシア語や韓国語が母語の英語学習者にも多く見られる。ロシア語、韓国語とも冠詞を持たないので、誤用の原因と分析される。しかし、興味深いことには英語と同様の冠詞体系を持つオランダ語母語話者が、冠詞を持つアラビア語を学習した場合、同じような冠詞誤用がみられることである。すると、母語に冠詞のある・無しは原因ではないと言うことになる。詳しく分析してみると、誤用が多くみられるのは先ほどの素性の組み合わせのうち、specific な文脈において definite の冠詞をＬ2 学習者が誤って使用する傾向があり、しかもこのエラーは話者の母語が冠詞を持っている、いないに関わらず、さらに、冠詞を持っていたとして、その冠詞が　definite-based か、否かに関わらず起こる、ということである。こうした事を踏まえると、人間は definiteness ではなく、specificity でもって名詞句を認識しようとする傾向があるのではないかという仮説が出てくる。ここで、疑問が出てくる。古英語の頃には、DP という機能範疇はなく中英語頃から文法化により definiteness を主たる意味とする D を主要部とする投射が従来の語彙的要素だけからなる NP 構造の上に出てきた (Osawa 2007, 2022) 。では何故、definiteness ではなく、specificity を基調とした冠詞体系に行かなかったのか、という疑問である。ここで、先ほど述べた、意味は客観的な意味から、より主観的な意味へ、さらに間主観的なものへと変化するという文法化が登場する。間主観化とは、意味が，より聞き手に焦点を置いたものになるということである。specificity は聞き手が意識されていない speaker-oriented であるが、definiteness は聞き手への配慮が言語化されている、hearer-oriented である。そう考えると、新たに出現した冠詞がより聞き手への配慮を表した definiteness の方向に行ったのは、この語用論領域での文法化の流れが影響したのではないかと考えられる。

6. 結論

この発表では、構造変化と間主観化という２つの文法化が歴史的に交わって言語変化に寄与しているのではないかと言う仮説を、冠詞体系の創発を中心に第二言語獲得にも触れながら展開した。文法化に動機は複数あり得る。どれかが他を排除するというようなものではない。文法化がそれ自体、変化を駆動するメカニズムであるかどうか、についてはまだ断定的なことは言えないが、この発表で見てきた事例を考えると、単なる随伴現象というより、もう少しそれ自体に普遍的なメカニズムが備わったものである可能性は否定できないと結論する。

*本研究は、科学研究費補助金、基盤研究(C) 課題番号(24K03950)による研究成果の一部である。

主要参考文献 Fodor J. and S, Ivan. (1982) "Referential and quantification indefinites." *Linguistics and Philosophy*: 355- 398. Osawa, F. (2022) "The Rivalry between definiteness and specificity," In *English Noun Phrases from a Functional-Cognitive Perspective*, Sommerer, L and E. Keizer (eds). 77 – 106. Benjamins. Traugott E. (2003) "From Subjectification to Intersubjectification." In *Motives for Language Change*. Hickey R. (ed.) 124- 140. CUP. Traugott E. and R. Dasher (2002). *Regularity in Semantic Change*. CUP.